サムエル記第一（27）
「油注ぎを受けるダビデ」
1 サム 16：1〜13

1. 文脈の確認
   Ⅰ．王政に向けた準備（1〜9 章）
   Ⅱ．サウルの治世（10〜31 章）
      A. サウルの確立（10〜14 章）
      B. サウルの没落（15 章）
      C. ダビデの台頭（16：1〜19：17）
         1. 王として選ばれるダビデ（16 章）
            （1）油注ぎを受けるダビデ（16：1〜13）
            （2）サウルに仕えるダビデ（16：14〜23）

2. 注目すべき点
   （1）サウルの時代からダビデの時代への転換
      ①悲しむ時から、神の新しい計画に従う時への転換である。
   （2）神の選びと人間の評価基準の違い
      ①「人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」（7 節）
   （3）ダビデは「【主】が選んだ王」である。
      ①サウルの場合、民が王を求めたことが出発点であった。
      ②ダビデの場合、神ご自身の選びが前面に出ている。
   （4）油注ぎと聖霊の働き
      ①王としての職務を遂行するための力がダビデに与えられた。
   （5）油注ぎと即位の間には長い訓練期間がある。
      ①神から召されたことと、その使命が実現する時とは必ずしも同じではない。
      ②ダビデにとって、この「待つ期間」そのものが王になるための訓練であった。

命題：神は、人の外見ではなく心を見て、ご自身の働きのために人を選び、備えられる。
この箇所を 3 区分して学ぶとそれが分かる。
Ⅰ．神は新しい王を選ばれる。（1〜5 節）。
   1. 1 節
1Sa 16:1　【主】はサムエルに言われた。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したか

ら。」

(1)「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。」

①サウルの失敗はサムエルにとって大きな痛みであった。

②しかし、悲しみにとどまり続けてはならない時が来る。

(2) サウルは神に退けられたが、神の計画そのものが失敗したわけではない。

①「角に油を満たせ。」

＊油注ぎのためのオリーブ油

②「わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。」

③「彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。」

＊民は「ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王」(8:5) を求めた。

＊それに対して今回は、神が主導権を握っている。

2. 2〜3 節

1Sa 16:2　サムエルは言った。「どうして私が行けるでしょうか。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。」【主】は言われた。「一頭の雌の子牛を手にし、『【主】にいけにえを献げるために来ました』と言い、

1Sa 16:3　エッサイを祝宴に招け。わたしが、あなたのなすべきことを教えよう。あなたはわたしのために、わたしが言う人に油を注げ。」

(1) サムエルは恐れた。

①これは現実的な恐れである。

②別の人物に王として油を注ぐことは、反逆行為と受け取られかねない。

(2) そこで神は、「【主】にいけにえを献げるために来た」と言うよう命じられた。

①これは偽りを命じられたのではない。

②実際にサムエルは、いけにえを献げるために行く。

③神はサムエルに目的のすべてをサウルに知らせるようには命じられなかった。

④「真実を語ること」と「知っていることをすべて語ること」は同じではない。

(3) 神が選ぶ者を神ご自身が示される。

①この段階で、サムエルは誰が王に選ばれるのか知らない。

②神が選び、神が示し、サムエルはそれに従う。

③ここに神の主権と人間の従順の関係がある。

3. 4〜5 節

1Sa 16:4　サムエルは【主】がお告げになったとおりにして、ベツレヘムにやって来た。町の長老たちは身震いしながら彼を迎えて言った。「平和なことでおいでになったのですか。」
1Sa 16:5　サムエルは言った。「平和なことです。【主】にいけにえを献げるために来ました。身を聖別して、一緒に祝宴に来てください。」そして、サムエルはエッサイと彼の息子たちを聖別し、彼らを祝宴に招いた。

（1）ベツレヘムの長老たちは恐れた。

①サムエルは神の預言者であり、イスラエルの士師でもあった。
②しかも直前には、アガグに神の裁きを執行している。

（2）「平和なことです。【主】にいけにえを献げるために来ました。」

①サムエルは、エッサイとその息子たちをいけにえの場に招いた。
②こうして、ダビデ選出の舞台が神によって整えられた。

II．神は人の心を見られる。（6～12 節）

1．6～7 節

1Sa 16:6　彼らが来たとき、サムエルはエリアブを見て、「きっと、【主】の前にいるこの者が、主に油を注がれる者だ」と思った。
1Sa 16:7　【主】はサムエルに言われた。「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」

（1）サムエルも外見に惑わされた。

①長男エリアブを見て、この者が主に油を注がれる者だと思った。
②サムエル自身が、サウルを選んだときと同じ基準に引き戻されかけた。
③サウルは「民のだれよりも肩から上だけ高かった」（9：2）人物であった。

（2）「人はうわべを見るが、【主】は心を見る」

①「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。」
②ここでの「心」は、単に感情を意味するのではない。
③思考、意志、動機、価値観を含む人間の内面全体を指す。
④神は、その人が神に対してどのような姿勢を持っているかをご覧になる。

2．8～10 節

1Sa 16:8　エッサイはアビナダブを呼んで、サムエルの前に進ませた。サムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言った。
1Sa 16:9　エッサイはシャンマを進ませたが、サムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言った。

1Sa 16:10　エッサイは七人の息子をサムエルの前に進ませたが、サムエルはエッサイに言った。「【主】はこの者たちを選んでおられない。」

（1）七人の息子が退けられる。

①次にアビナダブ、シャンマ、そして次々と息子たちがサムエルの前を通る。

②そのたびに、「この者も主は選んでおられない。」という結論になる。

③最終的に七人全員が退けられる。

④ここで強調されているのは、王を選ぶ主権は完全に神にあるということである。

3. 11 節

1Sa 16:11　サムエルはエッサイに言った。「子どもたちはこれで全部ですか。」エッサイは言った。「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。」サムエルはエッサイに言った。「人を遣わして、連れて来なさい。その子が来るまで、私たちはここを離れないから。」

（1）候補にも入っていなかったダビデ

①「息子はこれで全部ですか。」

②「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。」

（2）ここには印象的な逆転がある。

①ダビデは、父親からさえ王の候補として考えられていなかった。

②そのため、最初から宴席に呼ばれていなかった。

③しかも彼は羊を飼っている。

④人には重要でないと思われていた仕事が、神の訓練の場になっていた。

(3)「その子が来るまで、私たちはここを離れないから。」

①ここで物語の流れが止まる。

②神の計画は、神が選ばれた人物を中心に進む。

4. 12 節

1Sa 16:12　エッサイは人を遣わして、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目が美しく、姿も立派だった。【主】は言われた。「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」

（1）ダビデの外見についても記されている。

①外見を問題にしないと言った直後に、ダビデの容姿について記されている。

②これは矛盾ではない。

③問題は、外見を神の選びの基準にすることである。

④ダビデも魅力的な青年であったが、神が選ばれた理由は、その内面であった。

（2）「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」

①この箇所には、サウルとダビデの対比がある。

②サウルは人々の目に王らしく見えたが、その心は神から離れていった。

③ダビデは候補としてさえ見られていなかったが、神は彼の心をご覧になった。

Ⅲ．神は選んだ者を聖霊によって備えられる。（13 節）

1．13 節

1Sa 16:13　サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰って行った。

（1）油注ぎは、神の選びを公に確認する行為である。

①油注ぎは、王、祭司などが神によって任命されたことを示すしるしである。

②油そのものに魔術的な力があったわけではない。

③ダビデは神の前では王として選ばれたが、まだ実際の王座には就いていない。

（2）「兄弟たちの真ん中で」

①油注ぎは少なくとも家族の前で行われた。

②末の息子が、兄たちの目の前で神によって選ばれた。

③人が選ばなかった者を、神が選ばれた。

（3）「【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った」

①神は、選んだ者に、その使命を果たすための力を与えられた。

②ここには、選び → 油注ぎ → 御霊による力、という流れがある。

（4）「【主】の霊はサウルを離れ去り」（14 節）

①物語上の王権移行がここで決定的になる。

②その後には長い訓練期間が待っている。

結論：今日の信者への適用

1．過去の失敗や失望にとどまり続けない（1〜5 節）

（1）サムエルはサウルのことで悲しんでいた。

（2）「いつまで、あなたはサウルのことで悲しんでいるのか。」

（3）「神は今、何を始めようとしておられるのか」を見る信仰が必要である。

2．人を外見や能力だけで評価しない（6〜12 節）

（1）サムエルでさえ、エリアブを見て「この人こそ」と思った。

（2）「人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」（7 節）
（3）人から評価されないことと、神から用いられないことは同じではない。

3. 今置かれている場所で忠実に歩む（11〜12 節）
（1）ダビデは王になるための訓練学校にいたのではない。
（2）羊飼いとしての日々が、後にイスラエルの民を牧するための準備になった。
（3）神は、今置かれている場所での忠実さを用いて、将来のために人を整えられる。

4. 神の召しと、その実現の間には待つ期間がある（13 節）
（1）ダビデは油を注がれましたが、その日から王になったわけではない。
（2）この後、サウルに仕え、ゴリヤテと戦い、荒野を逃げ回る長い年月を経験する。
（3）神の時を待つことも、信仰の一部である。

5. 神の働きは、自分の力ではなく神の力によって行う（13 節）
（1）「【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。」
（2）旧約時代の聖霊の働きと、新約時代の聖霊の内住は区別する必要がある。
（3）神の働きは、神が与えてくださる力によって行うものである。